

## 「見方を変えてみよう」

2022年6月19日（日）仙台教会主日礼拝説教 マルコ8：1～10

牧師 宇都宮 毅

おはようございます。本日は父の日です。父の日の誕生はアメリカのソノラ・スマート・ドットという女性の嘆願から始まっています。彼女の父は軍人で南北戦争から復員した後、男手一つで6人の子どもたちを育てました。6人の末っ子だった彼女は教会での礼拝で、母の日があることを知ります。彼女は母の日があるなら、父の日もあるべきだと考えたのです。20世紀初めの頃でした。やがて1972年に、米国では6月第3日曜日を父の日とすることが、大統領告示で正式に定められました。母の日も、父の日もどちらも感謝を伝える日と言えます。きっとその感謝の思いは現代においては家族だけではなく、近くにいる多くの人たちにもされるべきだろうと思います。お世話になっている人たち、自分の居場所を築いてくれている人たちに、本心から感謝の思いをいつも持ち続けたいと思います。

さて感謝と聞くとき、クリスチャンはパウロが語った言葉を思い浮かべます。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」どんな大変なことが起きても、忍耐強く耐え、喜び、感謝をすることこそが、神を証することだと言われてきました。クリスチャンや教会に対してのイメージというものはこのような言葉から作られてきたように思います。どなたかを教会にお誘いするときに帰ってくる言葉があります。「私のような者が教会に行くなど、とんでもありません。」謙遜してそのようなことを言われているので、浮世離れしたような、倫理的な、理想の言葉を生きるどころと教会は考えられているのかもしれませんが、イエスはどうだったのでしょうか。

今朝は、喜ぶこと、祈ること、感謝することをイエスはどのように行っていたのかを、マルコ8章の4千人の共食の物語から考えてみたいと思います。

ガリラヤ湖の湖畔にイエス一行がいるとき、多くの群衆がいつものように集まってきました。イエスの周りに集まってくる人たちはどんな人たちだったのでしょうか。一部、イエスを観察して、貶めようと考えていた律法学者たちを除けば、ほとんどが社会の中に居場所を持たない人たちでした。幸せで、日常に不満を持っていないなら、わざわざイエスの元に来る必要などなかったからです。彼らはどんな社会的背景を持っていたでしょう。突然病気にかかった人たち、身体に障がいを持つことになった人たち、当時の普通と考えられた社会生活を行うことができない人たちでした。また職種によって、汚れた者として考えられ、社会的に差別されている人たち、さらに社会から見えなくされている女性や子どもたちもそこにいたのです。

そんな群衆を見て、イエスは語り始めます。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のまま家に帰らせると、途中で疲れきってしまうだろう。中には遠くから来ている者もいる。」イエスの洞察力、共感性をこの言葉から知ることができます。新共同訳聖書では「群衆がかわいそうだ」となっていますが、ギリシャ語原文では、「この群衆を私は憐れむ」という意味になります。遠くから群衆を見て、イエスは傍観し、感想を述べているわけではないのです。自分のこととして、イエスは群衆をあわれむという言葉語り、真剣に行動しようと考えていたのです。すると、弟子たちは答えます。「こんな人里離れた所で、いったいどこからパンを手に入れて、これだけの人に十分食べさせることができるのでしょうか。」実際、憐れむという行動を起こそうとするイエスに対して、弟子たちは現実的に無理だと答えているのです。5千人の共食の場面では自己責任として、各自でどうにかしてもらおうと考えていましたが、4千人の共食では無駄だ、あきらめろということ語る弟子たちがいたのです。ここには弟子たちの現実を認識する解釈が入っています。パンが足りない。つまり貧しく、差別され、病の中にある人々をイエスが憐れみたくても、憐れむことができない状況だと弟子たちは判断したのです。

しかしイエスはあきらめないのです。「パンはいくつあるか」と語り、弟子は「7つあります」と答えています。イエスは弟子たちが厳しいと考える現状の中、自分たちができることを懸命に探しています。あきらめる弟子たちとあきらめないイエスがいたのです。あきらめないイエスは再び地面に座るように、群衆に命じます。それもこの座るという言葉はギリシャ語で食事のために席に着くという意味になります。イエスはこの少ないパンで、共に食事をしようと呼びかけたということになります。群衆はイエスが沢山の食べ物を自分たちに提供してくれると考えたのでしょうか。おそらく4千人もいたら、そんな食べ物を用意することは難しいと群衆も考えていたように思います。しかし社会の中で、誰にも相手にされず、追い出され、見捨てられ続けていた彼らにとって、イエスの言動は自分たちを受け入れ、ひとり人間として心配してくれている嬉しい時間だったように思います。イエスはそこで、感謝の祈りを唱えています。6章の5千人の共食の時は、賛美の祈りでした。イエスは現状に感謝しています。何に感謝しているのでしょうか。贅沢な、沢山の食事を食べることができることではありません。貧しくても、病の中にあっても、共に座り、量は少なくても、食事ができる現実に、イエスは感謝を献げています。そしてパンを割き、人々に弟子たちが配ります。同様に、小さな魚も配り、賛美の祈りを唱えています。賛美とは神をほめたたえるということです。食事がこれしかありません。どうしたらよいのでしょうかではなかったのです。神様、ありがとうございます。あなたは何と素晴らしいのかと祈ったのです。イエスは少ない量の食べ物を見て、あきらめ、不満を漏らしていたら、このような出来事は起きなかったのです。彼はこの現状を喜び、祈り、感謝したのです。そしてその思いが群衆たちとイエス

を一つにしていったのです。

するとどうでしょう。人々は食べて、満腹して、パン屑が7かごになったというのです。この満腹とはどんなものだったのでしょうか。贅沢な、沢山の食事を食べて起こるようなことではないでしょう。大金を出して、自分だけで腹一杯食べることも違います。社会に見捨てられている者たちが一緒に座ることさえできない中、共に座り、少ないパンであっても、あきらめず、招いてくれたイエスがいたのです。そのイエスが不平不満を漏らすのでもなく、願いを祈るのでもなく、その現実を喜び、祈り、感謝しているのです。お前のような人間は必要がないと語られた日々があった人々です。そんな彼らと共に食事ができることをイエスは喜び、その姿から群衆は自分たちが生きていてよいのだという希望をもらっただろうと思います。彼らは命が満たされたのです。

そんな命の満たしが彼らにも行動をうながしたかもしれません。他者のために、持っているものをすべてささげるイエスの姿は、彼らに自分のものを少しでも役立ててもらいたいという思いを与えたかもしれません。ここにも、共に生きようとした歩みがあったかもしれません。パン屑≒7かごとは、そんなことなのかもしれません。

ここまでのイエスの物語を聴くとき、パウロが語っている言葉とイエスの実際の生き様の間に、違いを感じてしまいます。イエスは理想を語り、倫理的にこうしろと語ったわけではありません。群衆と出会い、憐れみたいと思い、行動を起こしたのです。パウロはクリスチャンとして、こうあるべきだと語っています。やはり、イエスは理想主義者というよりも、現実主義者のように思います。しかしその現実是我们が捉える現実ではなく、神の国の現実だったのではないのでしょうか。今まで、私たちクリスチャンはどんな状況であろうとも、「喜び、祈り、感謝しなさい」と言われてきました。倫理的な目標として、掲げられてきました。

しかし、そのようなことではなく、神から現実を見ると、私たちはそのような思いを持ち、行動を選んでしまうということが大切なように思います。

心や感情で、そのように思えないのに、「喜んで、祈って、感謝しなさい」と語られたとしたら、私たちにとって、それは苦行に過ぎません。けれども、目の前に見えている現実が本当にそう思えるなら、私たちは、心から「喜び、祈り、感謝」するものです。私たちは今目の前に広がっている現実を見間違っているのかもしれません。イエスのように、事柄の本質を知っているなら、私たちの周りには、もっともっと多くの喜び、感謝が満ちているのかもしれません。反対に、本当に神に祈らなければならないことがあるでしょう。

私たちは、聖書の言葉を現実としっかり結びつけて、その言葉に生きていきたいと思いません。新型コロナウイルスの感染によって、物事の本質が問われるようになりました。会社が集まり、残業して、仕事をしていたものが、在宅で、時間内で行うことによって、何が仕事

なのかが見えてきたはずですが。さらに、仕事だけを考えていた人たちが在宅で仕事を行うことで、家庭のこと、家事のことや子どもたちのことを考えるようになりました。教会もその本質が問われています。Zoom 配信によって礼拝を行ってきた私たちは、会堂に集まったの礼拝をどう捉えるでしょう。私たちは現実をどう捉え、どう生きていくのでしょうか。その姿を近くの人たちが見ているのです。イエスは神の国の到来を宣言しました。私たちが、その神の国という現実を今生きていなければ、イエスのことを伝えることができません。イエスは理想主義者のように思われることがあります。しかし彼は今ということに非常にこだわり、現実を鋭く観察し、人々の命を活かすためにどうしたらよいのかを考え、行動していた、現実主義者でした。私たちもイエスと同じように、神の国の現実主義者として、生きていきたいと思えます。

最後に聖書を一カ所お読みして、メッセージを終わります。

マルコ 1 : 15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」